調査研究報告

いくつかある動物園の役割の一つに調査研究があります。動物を飼うことを通じて得られた知識や情報は動物の飼育技術を向上させるだけでなく、動物園を訪れる方々へ広く公開することにより動物への理解を深められます。また、野生動物の生息地での保全活動に活用することもできます。

2016年に行った調査研究発表を紹介

実施月	研究タイトル名	場　所	研究会名	発表者等
1月	チンパンジーの新規導入と群形成	長崎ペンギン水族館	平成27年度(公社)日本動物園水族館協会九州・沖縄ブロック飼育技術者研究会	福守朗・森香奈
〃	オーストラリアの自然ゾーンの再整備と動物移動	〃	〃	鈴木大河・松元悠一郎・寺原三千男・落合晋作
2月	コツメカワウソ展示場でのエンリッチメントとその効果	大阪・海遊館	第2回コツメカワウソ計画推進会議	落合晋作・寺原三千男(平川動物公園)・山下菜々(帝京科学大学)他
7月	徳之島で保護されたアマミノクロウサギについて	熊本市動植物園	第29回九州沖縄ブロック動物園水族館獣医師臨床研究会	伊藤綾夏・落合晋作・海道夢紀 他
11月	鹿児島市平川動物公園におけるゾウ飼育体制の変遷	市原ぞうの国	第26回ゾウ会議	落合晋作・松元悠一郎・鈴木大河・海道夢紀
〃	鹿児島市平川動物公園および旧鹿児島市鴨池動物園におけるオランウータンの飼育の歴史	山口県宇部ときわ公園	第19回SAGAシンポジウム	福守朗
12月	ビントロングのエンリッチメント大集合！	東京都	エンリッチメント大賞2016	松元悠一郎 他
〃	コツメカワウソの飼育下自然繁殖において成長に影響を与える要因	福岡県大牟田市動物園	平成28年度九州沖縄ブロック飼育技術者研究会	海道夢紀・落合晋作
〃	ボランティア制度導入に向けて実施した大人向け講座	〃	〃	落合祐子・新西弘隆

イベント実施報告

飛躍する年へ～干支の交代式～

12月27日(火)、28日(水)に今回で4回目となる「干支の交代式」を実施しました。鳥の話をした後、サルに扮(ふん)した飼育員が「2016年はリニューアル工事もすべて完了し、平川動物公園が全面リニューアルオープン。新たにどうぶつ学習館、園内バス、ヤクシマザル舎が完成しました。」と一年を振り返ると、鳥を担当している飼育員が「鳥のように空を飛ぶ、飛躍できる年にしたいですね。」と返しました。

2017年は、平川動物公園が開園してから45周年の節目の年になります。動物園では節目にふさわしい様々なイベントを準備しています。皆さんに楽しんでいただけるよう職員一同頑張りますので、今年もどうぞよろしくお願いします!!

▲サルから子どもたちに質問！

▲飛躍できる年になりますように！

鹿児島市 平川動物公園
〒891-0133　鹿児島県鹿児島市平川町5669-1
TEL.099-261-2326　FAX.099-261-2328
■開園時間：午前9時～午後5時（入園は午後4時30分まで）
■休 園 日：12月29日～1月1日
URL　http://hirakawazoo.jp/
Facebook　https://ja-jp.facebook.com/hirakawazoo
Twitter　https://twitter.com/hirakawazoo
携帯サイトへアクセス！
動物取扱業の種別：展示　登録番号：生衛動取 第357号　登録の年月日：H28.5.11
有効期間末日：H33.5.11　動物取扱責任者：桜井普子

編集・発行
公益財団法人 鹿児島市公園公社
〒892-0816　鹿児島市山下町15番1号
TEL.099-221-5055　FAX.099-223-5690
URL http://k-kouenkousya.jp
Facebook https://ja-jp.facebook.com/k.kouenkousya

鹿児島市平川動物公園情報誌　2017 vol.15

Zoo(ず～)っと平川

特集1
フライングケージの楽しみ方

特集2
シリーズ かごしまの動物園 100年の歴史を振り返る

酉年特集 フライングケージの楽しみ方

フライングケージってこんなところ

フライングケージは鳥たちの暮らす空間に入って、動物を間近に観察ができる施設です。内部には草木が生い茂り、五位野川から引いた水が流れ、ベンチのある東屋では目の前の池で水浴びをする鳥をのんびりと眺めることができます。この東屋では卵殻の展示やイベントのお知らせなどを掲示していますので通りすがりにちょっとのぞいてみてください。
全部で６種64羽（2017年1月31日現在）の鳥たちを展示していますが、６種すべて見つけられる方はほとんどいません。みなさん１，２種類見つけると満足して足早に次のゾーンへと向かってしまいます。せっかくの酉年、この機会に頭上や足元、茂みの中などじっくり探してみてはいかがでしょうか。

全６種をご紹介！！

セキショクヤケイ

～ニワトリの祖先！～

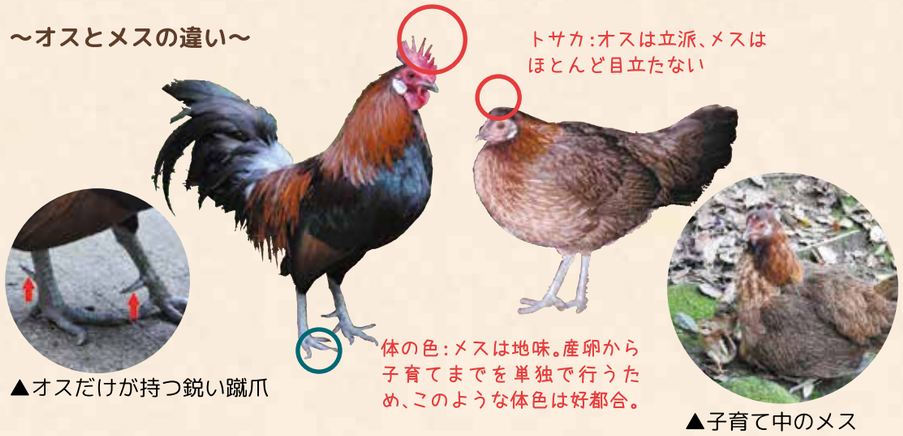
ニワトリではありませんよ！？東南アジアの森林に生息している、ニワトリの祖先（原種）と考えられています。夜明けとともに起きだして、オスが大きな声で鳴くことから「時告げ鳥」として飼い慣らされたのが始まりといわれています。

～家禽化されるまでの歴史～

オス同士は縄張りをめぐって「蹴爪」と呼ばれる大きな爪で激しく蹴り合い、ケンカをします。この習性に目を付けて、オス同士を戦わせて賭けをする「闘鶏」や占いをするようになりました。その後品種改良が行われ、卵を多く産む採卵鶏や、成長が早くおいしい肉を取れる肉用種など数多くの種類のニワトリが誕生しました。実は、鹿児島で誕生した「薩摩鶏」はもともと闘鶏用に作られた品種で、この薩摩鶏に「ロードアイランドレッド」という品種を交配し、開発されたニワトリが、みなさんが美味しく食べている「さつま地鶏」なのです。

▲鹿児島で誕生した「薩摩鶏」

～オスとメスの違い～



▲オスだけが持つ鋭い蹴爪

▲子育て中のメス

～飛べる？飛べない？～

セキショクヤケイは、ニワトリと同様、一般的な鳥のように飛翔することはできません。
しかし、一階の屋根程度の高さなら飛び上がることが可能です。ニワトリは飼い慣らされる過程で胸筋が退化していったため、飛び上がっても人の腰の高さ程度です。

フライングケージでは、地面を歩いているか、手すりに止まっている姿をよく見ることができます。その他にも、地面を掘って虫を探したり、砂浴びや日光浴をしたり･･･自由気ままに生活している彼らを見ていると自然と癒されますよ。

ショウジョウトキ

カリブ海沿岸の南アメリカに生息しています。真っ赤な羽と細く曲がったクチバシが特徴的。木の上や屋根の鉄骨など、高い所によくいます。お気に入りの場所をめぐってケンカをすることもしばしば…。頭上からの落し物（糞）には要注意です！

～フライングケージ鳥ビア～

生まれた時の姿は･･･？
美しい赤色はエサに含まれる「アスタキサンチン」という成分によるものです。幼いうちは全身濃い灰色で、成長とともに羽が抜け変わり、このような色になります。

シュバシコウ

朱色のクチバシをしたコウノトリの仲間、シュバシコウ。ヨーロッパに多くすみ、高い木の上や人家の煙突の上に営巣します。３月頃からは営巣する様子も見ることができます。
巣は枝などを組んで皿状にしたもので、毎年営巣する場所は変わります。枝をくわえて飛んでいる姿を見かけたら、応援してあげてください。

～フライングケージ鳥ビア～

声を持たない鳥
大人になると声が出せなくなるため、クチバシを打ち鳴らしてコミュニケーションを取ります（クラッタリング）。

オシドリ

日本の他、ロシアや中国などに生息します。茂みの中などを好み、なかなか姿を見せてくれませんが、ぜひ探してみてください。全体的に地味な灰色をしていますが、目元をよく見ると可愛らしいアイラインが！また、オスの派手な銀杏羽は繁殖期限定で、その他の季節はメスとそっくりな姿です。

アネハヅル

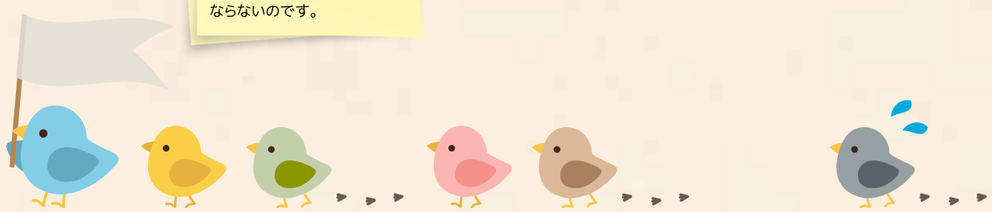
ヒマラヤ山脈を越えて渡りをすることで有名なツルの仲間です。フライングケージにいる２羽は姉妹でとっても仲良し！いつでも一緒に行動しています。たまに驚いて１羽が飛んでいってしまうと、お互いを探して鳴き交わすほどです。
ツルの仲間は一部を除き、木の枝などに止まることができない足の形をしています。前方に３本の指が伸びていますが、その反対側の指は短く、物をつかむことができません。私たちが親指を使わずに物をにぎろうとすると、上手につかめないのと同じ理屈です。このため、地上を歩いていることがほとんどです。

カルガモ

アジア東部から南部にかけて生息し、日本では年中見ることができます。開けた場所を好むため、よく日光浴をしています。クチバシの先が黄色いのもポイントです。池の中をスイスイと器用に泳ぐのとは対照的にちょっと不器用な歩き姿にも注目してください。

～フライングケージ鳥ビア～

脂で水をはじきます！
カルガモをはじめとする水鳥たちは、水浴びをして羽を整えるのが大好きです。実はこの時、尾羽の付け根にある腺（尾脂腺）から出る脂を取り、羽に塗りつけています。このため泳いだ後もびしょびしょにはならないのです。



見所いっぱい！

園路沿いにはたくさんの見所があります。鳥たちのいろんな様子をのぞいてみましょう！

見所1 欄干（橋の手すり）

セキショクヤケイのねぐらはフライングケージ入ってすぐの橋。16時頃になると、この橋の欄干（らんかん）にセキショクヤケイたちが集まってきます。

見所2 営巣木となる木

フライングケージに入り坂を下りきった右側にある木。ショウジョウトキは大体このあたりに集まっていることが多いです。日によって異なりますが、９時～１０時ごろにはこの木がある丘の上でエサを食べている姿を見ることができます。何羽も木に止まる様子は、きれいな花のようです。

見所3 コンパクトな水浴びスポット

更に進んだ右側には、ちょうど目線の高さにコンパクトな池があります。下にある大きな池よりも深さがあるため、ショウジョウトキやオシドリの人気の水浴びスポットとなっています。

園路や東屋 見所4

開けた場所ではカルガモが休憩していることが多いです。園路で出会ったら、道を譲（ゆず）り合ってくださいね！

見所5 エサ置き場

池の縁（ふち）にある銀色のバットはエサ置き場となっていますので、ショウジョウトキが 14 時頃には魚をつつきに下りてきている姿が見られるかも？！ただし、警戒心（けいかいしん）が強いので、魚を置いた直後や人に見られているとなかなか食べに来ません。そ～っと見守ってください。

飼育員からひとこと

鳥たちは臆病（おくびょう）なので、無理に近づこうとすると逃げてしまいます。逆にそっと見守ってあげていれば、普段見せてくれない姿を見ることができるかもしれません。いつもは通り過ぎてしまうだけのフライングケージでも、ゆっくりと時間をかければ新たな発見ができますので、ぜひじっくりと観察してみてください。

担当者：大沼、牟禮

シリーズ かごしまの動物園100年の歴 史を振り返る②

～鴨池動物園の賑わい そして、平川動物公園へ～

昭和23年（1948年）

3月　日本アルプス産のツキノワグマ３頭を購入。鹿児島県産のサルシカ、ツル、カモ、オシドリ、アナグマ、タヌキなど捕獲し充実を図る。

6月　動物園水族館協会総会が鹿児島で開催され、全国動物園の戦後復旧が主題となった。

昭和26年（1951年）

6月　トラ１つがい、ヒョウ１つがいを購入。鹿児島大学水産学部長、山本清内氏の教え子で、タイ国のウドム・サン・カサブ氏がインドゾウ１つがいを寄贈。（ドム、タイ子）

9月～10月　南日本新聞東部支社主催の移動動物園を鹿屋市で開催。ゾウ、クマ、クロヒョウ、コヨーテ、サル、ニシキヘビ、小鳥類を展示。

10月14日　ルース台風で動物舎、遊具施設、樹木に大きな被害。

12月　ワニ５頭、ライオン２頭購入。

昭和27年（1952年）

6月　アシカ１頭購入。

8月　ダチョウ１羽購入。

9月　キリン１頭購入。（富士子）

昭和28年（1953年）

2月　クジャク、トカラウマ購入。

3月　シロテテナガザル、アカゲザル、九官鳥購入。

6月　ラクダ１頭購入。（ミネ子）

9月　鴨池動物園市営25周年記念式。動物カーニバルを開催し、ラクダなど動物の市中パレード実施。

昭和29年（1954年）

8月　チンパンジー1頭購入。（マリー）

昭和30年（1955年）

3月　アカカンガルー２頭購入。

5月　キリン1頭購入。（命名／長生）

11月　スイギュウ２頭、マレーグマ２頭購入。

昭和31年（1956年）

9月　チンパンジー１頭購入。（博男）

10月　「誰でもわかる科学博覧会」を南日本新聞社と共催。

10月18日　博物館相当施設認可。（文部省告示第68号）

昭和32年（1957年）

10月　アシカ４頭購入。トカラウマ４頭、ヤマアラシ４頭購入。

12月25日　鴨池水族館建設着工（園内既存の食堂を改装）

昭和33年（1958年）

5月15日　鴨池水族館竣工。総工費6,660,000円

6月1日　鴨池水族館オープン。入館料/大人30円、小人20円。

6月4日　シマフクロウ１羽、札幌市の円山動物園から寄贈。

10月　動物園市営30周年記念「動く大菊人形博物館」を南日本新聞社と共催。

昭和34年（1959年）

4月6日　鴨池水族館、博物館相当施設認可。（文部省告示第38号）

昭和35年（1960年）

4月1日　動物園と水族館料金一本化。大人50円、中人30円、小人20円に改正。改札口を鴨池公園の北側の門に移す。動物園の外にあった水族館、ボート池など園内となる。

4月3日　南日本新聞社主催の照国神社の観桜会にチンパンジー（博男とマリー）が出演。

9月　インドゾウ1頭購入。（カン子）

10月8日　「世界観光風俗博覧会」開幕。南日本新聞社と共催。

昭和36年（1961年）

8月　夏休み動物園教室開催。（6日、13日、20日）世界の哺乳類、鹿児島県の動植物、魚の飼い方など。

11月25日　コブハクチョウ１つがいを動物親善使節として台北市に贈る。

12月　アライグマ１つがい、カンガルー１つがい来園。久留米動物園からカササギ、クジャクバト寄贈。

昭和37年（1962年）

1月20日　台北市からキョン１つがい、ミカドキジ１つがいを寄贈。

3月17日　動物慰霊碑を建立。

3月21日　動物愛護週間にちなんで動物愛護子供座談会を開催。永年勤続動物表彰。マントヒヒ（冠太郎）25年、コンゴウインコ25年、ニホンザル（隈子）30年。

6月15日　ゾウガメ１頭購入。

11月　ワラビー１つがい購入。

昭和38年（1963年）

10月3日　埋め立てられたボート池跡にモノレール、ミラーハウス、花園の跡にティーカップを建設し営業を開始。

○平和を連れてやってきた、ゾウのドムとタイ子

終戦を迎えた鴨池動物園。戦前の賑わい、市民の憩いの場を取り戻すべく、しばらくは展示動物種の充実が課題となりました。昭和23年（1948年）のニホンツキノワグマをはじめ、ニホンザル、シカ、ツル、カモ、オシドリなどが続々と来園し、少しずつ賑わいを取り戻していきました。そして昭和26年（1951年）、鹿児島に再びゾウがやってきました。鹿児島大学水産学部で学んでいたタイの留学生・ウドム・サン・カサブ氏が「鹿児島の子どもたちにもう一度ゾウを見せてあげたい！」という思いから寄贈されたのは、インドゾウのドム（オス）とタイ子（メス）。２頭は市役所から鴨池動物園までトラックに乗ってパレードし、街はゾウを一目見ようと集まった多くの人で賑わいました。

▲トラックに乗ってのお披露目

戦後６年が経っていましたが、鹿児島もまだ発展途中だったといいます。また、朝鮮半島ではこの時戦争が行われていました。パレードの賑わいを目に焼き付けて、これからの平和を願った方もきっと多かったことでしょう。

▲鴨池動物園の賑わい 昭和26年

○鴨池動物園の発展

ゾウの後、キリンやチンパンジーなど、動物種の充実はますます進みました。戦争中にキリンが不在となったキリン舎の壁には２頭のキリンの絵が描かれていましたが、昭和26年に久し振りにキリンがやってきました。絵でしかキリンを見たことがなかった子どもたちは、実物を目の前に、どんなに驚いたでしょうか。

▲キリン舎に描かれたキリンと久し振りにやってきた2頭のキリン

昭和39年（1964年）、東京オリンピックの年に寄贈されてやってきたオランウータンは、「ピック」と名付けられました。鹿児島から岡山県・倉敷市の水島港まで迎えに行った元・平川動物公園長の川畑純徳さんは「半信半疑で迎えに行ったが、本当にオランウータンだとわかった時はとても嬉しかった」と話をされていました。ピックはその後様々なイベントに登場し、またお父さんとしても活躍しました。

▲昭和27年4月アシカショーがスタート

また、昭和30年代は様々な催し物が開催され、さらに鴨池動物園が賑わいました。特に、昭和31年（1956年）の「誰でもわかる科学博覧会」、昭和33年（1958年）の「動く大菊人形博覧会」、昭和35年（1960年）の「世界観光風俗博覧会」、そして昭和39年（1964年）の「メキシコ博覧会」。この４つの博覧会が鴨池動物園で開催されたことで、多くの方が動物園に足を運び、また動物園のシンボルともなる建造物が次々と建設されました。

▲動物慰霊祭に出席したピック

▲「永年勤続動物賞」として表彰されたニホンザルの隈子と当時の梶原園長

現在平川動物公園で行われているイベントの基となったものもあります。昭和31年には「夜間開園」、昭和36年（1961年）には「夏休み動物園教室」が、昭和41年（1966年）には「秋の動物園まつり」が開催され、動物園の楽しみ方が広がり、イベントの発展へとつながっていきました。

○更なる発展を目指して、新天地へ

動物園と同時に鹿児島市内の発展も進んだ昭和40年代。「与次郎ヶ浜」の埋め立てや、鴨池空港の移転計画、ビルの建設計画など、動物たちにとっての環境も変化していきました。動物たちがゆっくり過ごすことができる新たな環境を探し、現地調査が始まったのは昭和44年（1969年）の１月のことでした。

▲土地の買収が済んだ建設予定地

候補地に挙がったのは、平川、五位野、慈眼寺、伊敷、そして吉野の５地区で、元上野動物園園長の古賀忠道氏を迎えての調査が進み、昭和45年（1970年）には新しい動物園の建設地の買収、翌昭和46年（1971年）には東京農業大学の近藤典生先生による「新動物園基本設計構想」が説明されるなど、着々と移転の準備が進んでいきました。

平川動物公園は、JR五位野駅や国道からアクセスする場合、桜島を背にして山に向かって進みます。当初はそのまま山側に動物園が広がる予定だったそうですが、現地調査をされていた近藤先生がふと振り返った際に目の前に広がる桜島を見て、「桜島をアフリカのキリマンジャロに見立ててみては！？」と思いついたそうです。予定は変更され桜島に向かって動物園が広がる設計に。キリマンジャロに見立てた桜島が広がる、現在のアフリカの草原ゾーンができあがるのにはこんなエピソードがあったのです。

▲近藤先生によるアフリカの草原ゾーンのイメージ画

新動物園の建設が急ピッチで進む中、昭和47年（1972年）２月29日に鴨池動物園は55年の歴史に幕を閉じます。惜しまれつつの閉園ではありましたが、それは平川動物公園の開園、そして「鹿児島・動物園100年のキセキ」へとつながるのです。

今回は教育普及係 落合が担当しました。次回は平川動物公園の開園からコアラの来鹿、リニューアルに至るまでをお伝えします。

昭和39年（1964年）

2月6日　オランウータン１頭日正汽船（日安丸）の機関員上村年巳氏（頴娃町出身）より寄贈。（ピック）

10月23日　「メキシコ博覧会」を南日本新聞文化事業団と共催。11月23日まで。

昭和40年（1965年）

7月　テナガザル１頭、ワニ２頭、九官鳥２羽をバンコク在中の上松次雄氏、森園博康氏から寄贈。

昭和41年（1966年）

4月15日　チンパンジー２頭購入。（リリー、チコ）

5月　チンパンジー１頭購入。（ジロー）

7月30日　開園50周年記念「動物園のあゆみ写真展」を開催。8月31日まで。

10月16日　開園50周年記念「秋の動物園まつり」を開催。

10月24日　開園50周年記念して、北海道帯広動物園からオジロワシ１羽寄贈。

11月1日　開園50周年記念して動物人気投票を実施。チンパンジー1,235票　サル952票　ゾウ785票

11月13日　開園50周年記念式典を挙行。感謝状贈呈、鼓笛隊演奏、郷土民芸など。最年長動物表彰/ニホンザル（隈子）35歳。

12月19日　台北市立動物園から「ヤマムスメ」４羽が開園50周年記念に寄贈。

昭和42年（1967年）

6月3日　旭川市旭山動物園の開園祝いにヤクシカ１つがい、マントヒヒ１つがい、シロクジャク１羽を贈る。

9月　東京都上野動物園からニシキヘビ２頭寄贈。（同園生まれ生後２ヶ月）

11月1日　日本国内航空の施設路線（鹿児島ー徳島ー東京）を記念して徳島市動物園と動物交換。徳島からニホンジカ１頭、本園からキョン１頭ハブ２頭を贈る。

12月　出水市荒崎で保護されたヘラサギ２羽来園。ジャガー１頭、コクチョウ１つがい、コシアカキジ１つがい購入。

昭和43年（1968年）

6月1日　シベリアオオカミ１頭、旭川市旭山動物園から来園。

7月5日　出水市荒崎で保護されたナベヅル７羽が来園。

昭和44年（1969年）

1月16日　動物園移転候補地の現地調査はじまる。

3月16日　仙台市八木山動物公園からマレーグマ1つがいと当園からヒョウ1頭を、静岡県三島動物園からワラビー１つがいと当園からマントヒヒ１つがいを動物交換。ジャガー１頭、リスザル２頭購入。

9月29日　古賀忠道元上野動物園園長を迎えて、動物園移転候補地５ヶ所（平川、五位野、慈眼寺、伊敷、吉野）を現地視察。

9月　愛媛県立道後動物園からハクビシン２つがい、アライグマ１つがいと当園からヤクシカ１頭、トカラヤギ１頭を動物交換。トラ１つがいを購入。

昭和45年（1970年）

9月1日　鴨池動物園の電車線路側の敷地の一部に予定されていた鴨池ビル（中央保健所など入居）建設工事のため、動物舎（カンガルー舎、ツル舎、ペンギン舎、クジャクバト舎）と樹木の移設工事がはじまる。

9月　新動物園建設用地（鹿児島市平川町五位野宇平床）大半の買収終わる。

昭和46年（1971年）

1月16日　「市立動物園建設プロジェクトチーム」発足。

1月22日　東京農業大学育種学研究所の近藤典生教授による基本設計構想の概要説明。

3月　徳之島で捕獲された「コウノトリ」を保護

3月31日　新動物園の基本設計構想が提出される。

4月5日　新動物園の起工式開催。

5月　新動物園の整地、その他土木工事着手。

5月　クロザル、スポットノーズ、サイクスモンキー、オマキザル、インドシロリス、スカンクの寄贈。（鹿児島市長田町篠原直樹氏）

11月23日　「さよなら動物園子供大会」を開催。

12月　動物舎建設工事に着手。

昭和47年（1972年）

1月23日　新規購入動物の購入契約締結。21種128点が契約金額25,356,000円。

2月29日　鴨池動物園閉園。公園条例一部改正により入園料、遊具施設料を廃止。

3月1日　無料開園。（遊具の使用については、のりもの整理料として徴収。）

9月2日　動物輸送委託契約を締結。（インドゾウほか20種52点、極東貿易株式会社、委託料1,628,000円）

9月20日　動物輸送はじまる。第１陣はインドゾウ（ドム）。９月30日に動物輸送完了。

10月6日　ローランドゴリラ、クロサイ来園。

10月7日　キリン来園。

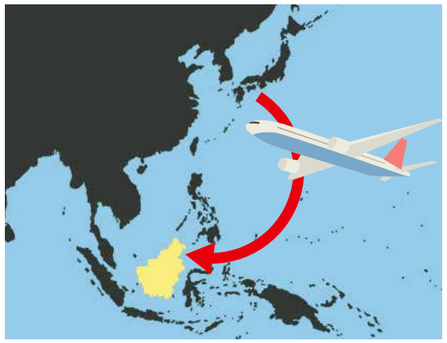
10月9日　ホッキョクグマ、ワニ類、フラミンゴなど来園。

10月14日　平川動物公園開園。（開園式）

飼育員・森のボルネオ島紀行

オランウータンの故郷を訪ねて

平川動物公園でも飼育されているオランウータン。
「オランウータン」といっても、実はボルネオ島に生息する「ボルネオオランウータン」と、スマトラ島に生息する「スマトラオランウータン」の2つに分類されていることを知っていましたか？
平川動物公園では現在、ポピーという「ボルネオオランウータン」のオスを飼育しています。
近年、彼らのすむ森は、違法な森林伐採や大規模な森林火災などにより失われつつあり、そうしたことから、彼ら自身もまた年々数を減らしています。
今回は2016年8月5日から12日にかけて BCTJ（Borneo Conservation Trust Japan：特定非営利活動法人ボルネオ保全トラストジャパン）のスタディツアーに参加し、オランウータンの故郷ボルネオ島に行きましたので、その様子についてご紹介します。



●『ボルネオ島』ってどんなところ？

・3つの国（インドネシア、マレーシア、ブルネイ）からなる
・面積は約74万6,000㎢（日本の約2倍）、世界で3番目に大きな島
・日本からは成田空港からコタキナバルまで直行便で約5時間ほど

●森へ入る前に・・・

現場へ行く前に、まずは現地の研究者・スタッフによるレクチャーを受けました。ボルネオの歴史や文化、民族から最近の熱帯雨林の状況やオランウータンの調査研究など、初めて知ることも多く、非常に興味深いものでした。

●いざ、森へ！

「リバークルーズ・ジャングルトレッキングで野生動物の観察へ」
毎日朝から動物三昧。果実期ということもあり、オランウータンをはじめヒヨケザルやサイチョウ、テングザルなど、いろんな動物に出会うことができました。さすがは現地のガイドさん、私には黒い点にしか見えませんでしたが、何十メートルも先のオランウータンをあっさり見つけていました。
そして、オランウータンのためのつり橋も見学。オランウータンは樹上生活をしており木を伝って移動するため、森がないと生きていくことができません。特に、今回行ったキナバタンガン下流域は、支流によって彼らの生息域がいくつにも分断されており、つり橋はそうした場所を行き来できるように設置されたものです。ちなみに、今では動物園でおなじみ「消防ホース」が現地のつり橋に利用されています。
オランウータンだけでなく、テナガザルや他の動物たちも活用しているとのこと。

▲テングザル

▲カニクイザル

▲ルリカワセミ

▲サイチョウ

▲支流の上を通る「つり橋」

▲ナイトウォークで闇夜に光る不気味な目…。ジャコウネコ科のパームシベットに遭遇！

▲シラガシキチョウ（左）と野生のドリアン（右）

▲さすが熱帯？虫もビッグサイズ！

●電気・ガス・水道なし！

ツアー3、4日目はキャンプサイトに宿泊ということで、若干の不安を抱えていましたが、行ってみると意外と快適でした。
朝は鳥の声で起き、夜は日没とともに…とはいきませんでしたが、夜遅くまで他の参加者の皆さんとホタルや星の観察をして過ごしました。

▲蚊帳も初体験

●アブラヤシプランテーションと搾油工場

「パーム油」って知っていますか？これはアブラヤシの実からとれる植物油で、世界で最も生産量が多く、今では私たちの生活には欠かせないものとなっています。そんなパーム油ですが、熱帯雨林の伐採と急激な減少の要因の一つでもあります。現地では今、持続可能な方法で、環境や社会に配慮して生産されたパーム油を認証する「パーム油の認証制度」が広がりつつあります。今回はその認証施設へも行き、作業の様子や施設での取り組みなどを見学してきました。

～収穫から精製まで～

① アブラヤシの実の収穫

▲（左）機械化できず、すべて手作業で収穫
▲（中央）水牛が使役動物として活躍
▲（右）40kg 以上になる果房をどんどん積み込んでいきます

② 搾油工場へ運搬

▲（左）すぐに搾るためにそのまま工場へ
▲（中央）コンテナで果房のまま蒸気で蒸します
▲（右）搾油機で搾られます

③ 精製工場へ

搾られた原油は各地の精製工場に運ばれ、精製パーム油となり、この精製パーム油が食用油や洗剤、バイオディーゼルなどに使われます。

●植林活動体験

植林活動も体験してきましたが、これが思った以上に大変でした。
キャンプ地から植林の場所まではボートと徒歩で移動。船着場からは片道 1 kmほどの道のりですが、苗木を持っての移動に加え、前日の雨で足場はぬかるみ、1 時間ほどかけてようやく現場へ到着。着いたころにはすでにへとへとでした。

▲植林する苗木（左）を抱え、ぬかるんだ場所を進みます
▲（右）やっと現場へ到着！

▲（左）まずは土地の開拓。使い慣れない道具で悪戦苦闘…。
▲（右）穴を掘り、ようやく植樹完了！

実際の作業を通して、失った森を取り戻すことがいかに大変なことか、あらためて学ぶことができました。そして、帰り道では疲れ切って、ほぼ無言になる参加者たちでした…。

●セピロク・オランウータン・リハビリテーション・センター

様々な理由から保護されたオランウータンを森に帰すためのリハビリを行う施設。保護されたオランウータンたちは、いくつかのリハビリのステップを経て、再び森へ帰っていきます。森へ帰ったオランウータンの中には、自分の子どもを連れて、施設を訪れる個体もいるそうです。

▲保護される理由は様々です

▲「マリコ」と名付けられたメスのオランウータンとその子ども。
マリコは過去にも何頭か子どもを連れてきています。

●ツアーに参加して

実際に生息地を訪れ、動物のみならず、植物やそこに住む人々の生活・文化・自然との関わりなどを自分の目で見ることができましたがまだまだ伝えきれていないなぁ、と実感することばかり。今回の体験を通し、動物たちのこと、人との関わり、そして彼らをとりまく環境について伝えていきたいと思います。

担当者：森

『大人のための羊毛教室』を開催しました！

2016 年、新しく大人向けのイベント「大人のための羊毛教室」を行いましたので、その開催レポートをお届けします。このイベントは事前申し込み制の 5 月、7 月、9 月の全 3 回セットで、15名の方が参加してくださいました。

目的
①ヒツジから毛糸ができるまでの過程を体験する。
②家畜動物を身近に感じ、興味を持ってもらう。
③子どもたちだけではない、大人の動物園の楽しみ方を見つけてもらう。

第１回（５月）

○ヒツジのお話

ヒツジってどんな動物‥？ということで、ヒツジの生態から、ヒツジと私たち人間の暮らしの関わりなど、ヒツジについて勉強しました。
ヒツジは、私たちの暮らしのあんなところ、こんなところで活躍しているんだ！！と、学んでもらいました。

○ ヒツジの毛刈り

そして、実際に本物のヒツジの毛刈り体験。ハサミを使い、慎重（しんちょう）に刈っていました。初めて切るヒツジの毛の感触。ヒツジは毛が生え変わらないため、このように毛刈りをして暑い夏を乗り切ります。

▲ヒツジを保定（ほてい）（動かないようにおさえておくこと）して、毛を刈っていきます。

第２回（７月）

○ヒツジの毛を洗う

ヒツジの毛は汚れもたくさんついています。お湯や洗剤を使いながら、丁寧（ていねい）に汚れを取っていきます。最初は汚かった羊毛も、何度もすすぐことで綺麗（きれい）になっていきます。綺麗になった羊毛は、日の当たるところに広げて干します。

▲炎天下での作業。みるみる汚れが落ちていきました。

○羊毛を染める

自然染色（しぜんせんしょく）をしてみよう！ということで、コアラのエサとなるユーカリで、羊毛を染色してみることに。ユーカリの葉で、どんな色に染まるのか‥ぐつぐつと加熱していきました。

▲染色用にユーカリの葉を摘んでいきます

▲だんだん薄い茶色が出てきました

○ 羊毛をほぐす

洗って綺麗になった羊毛を、ほぐしていきます。

▲身近な道具・櫛（くし）でほぐします。地味な作業ですが…

▲こんなにふわふわになります！

第３回（９月）

毛糸になるまでのお話、毛糸作り体験

ふわふわになった羊毛から、実際に毛糸はどのように作られているのか‥。毛糸の仕組みを学びながら、体験してもらいました。毛糸になると、さらに身近なセーターやマフラーなどの製品になっていきます。

▲羊毛を手で撚（よ）っていくと…毛糸らしくなってきた！

○ 羊毛マスコット作製

最後に、羊毛でヒツジのマスコット作り。毛刈りから体験して綺麗にした思い入れのある羊毛で、ヒツジのマスコットを作りました。

▲熱中してついつい無言に…

羊毛マスコットが完成！▲

全3回を通し、家畜（かちく）としてのヒツジの役割を学んでもらいました。『ヒツジ』という私たちの生活の中で身近な動物に注目し、新たな発見ができたでしょうか？街には『ヒツジ』に関わるものが実はたくさんあります。身の回りの意外なところにも、『ヒツジ』が活躍しているかもしれませんよ！動物園では、大人の方も楽しめるイベントをこれからも企画していきますので、どうぞお楽しみに！

担当者：角田